

## 「山岳部の災害ボランティア」

## 宮城県白石高等学校

### 1. 活動の概要

白石高校男子山岳部では平成23年4月に6日、同年11月に4日の災害ボランティアを行った。理由は津波で甚大な被害を受けている地域が身近にあるにもかかわらず山に登っている場合ではないと思ったからである。特に部員の1人である3年生の生徒会長が支援物資を30km先の被災地・山元町まで自転車で運んだことが刺激になった。宮城県亘理町・山元町の社会福祉協議会へ申し込んでボランティアセンターでの災害ボランティアに参加した。4月は2・3年生8名と顧問1名、11月は1・2年生9名と顧問1名で参加した。4月は個人宅の瓦礫・汚泥の撤去等、11月は個人宅の壁・天井剥がし等を手伝った。また、ボランティアセンターにテントを張って全国各地からボランティアに参加している人たちとの交流もあった。

### 2. 活動の成果等

#### 生徒A (4月)

震災が起こり、少し落ち着いたころ、何か困っている人の手助けができればと思うようになりました。そんな時、先生からボランティアに行くぞと言われ、僕は嬉しくて、少しドキドキしながら亘理町に出かけました。しかし現実はとてもひどいものでした。津波で家が流され、何もなくなってしまった町もあったし、家は残ったものの庭には誰のものか分からない私物や車が散乱し、家の中には津波できた泥がいたるところにこびりつき、とても生活できるようなものではありませんでした。そこで初めて少しうわついた気持ちで来た自分はまちがっていたと気づき、そして改めてボランティアに対する気持ちを強くしました。

#### 生徒B (4月)

内容は濃く、大変な力仕事となりましたが終わる度に味わう、あの充実感は普通の学校では感じることの出来ないものとなりました。だから私は常に一所懸命に働き、こんなに一輪車を押したことがない、というぐらい押し、こんなにスコップで泥を掬ったことがない、というぐらい掬いました。また、そうしていくうちに、だんだん作業が楽しくなっていくのをやりながら感じることができました。

#### 生徒C (4月)

その家を出る時、家の主であるおじさんは、目に涙を浮かべながら深々と頭を下げ、ただ「ありがとうございました。」と呟いていました。その姿を見て、私は初めて心を打たれた感覚を覚えました。私の文章力では文字にすることは難しいですが、それほど深い感銘を受けました。「どうしてそこまで感謝するのか、私たちがボランティアをするのは当たり前じゃないか。」と、どうにもできない感情に襲われました。その姿は地震から約2カ月が過ぎた今も鮮明に覚えています。

#### 生徒D (4月)

ボランティアを始めてから共通して感じるのは、ボランティアの人たちはみんなやる気に満ちていて、少しでも被災された方の役に立てればと一生懸命に活動していることでした。そして活動をした後に、その家の人たちがみんな「ありがとうございました。」と言ってくれることがとても嬉しく思います。それこそがボランティアの人たちのやる気にもなると思うし、それこそが原動力だと思います。そしてボランティアのほとんどの人が県外からの人でした。車のナンバーを見ると一目で分かります。特に多いと感じたのが関西からのボランティアの人たちでした。日本各地から助けにきてくれていることに感謝します。

#### 生徒C (11月)

私たちが約十回に渡り行ったボランティアで何か変えられたかと言えば、私たちの力は被害に比べればたいへん微々たるもので、ほんの少しの力にしかなっていません。しかし、今回経験したこと、忘れてはならないこと、これらは学校にいたのでは到底感じることはできません。生で見て、生で感じ、思ったことは、学校では教えられないもっと人間の本質的なものだったと私は思います。これを学べたこと、体感したことは、私の未来を生きていくうえでとても大切な経験になりました。

#### 生徒D (11月)

もはや8ヶ月が過ぎた今、あの震災のことを忘れていない人も少なくないと思います。しかし今回の山元町のボランティアで改めて、あの大地震はまだ続いているのだと思いました。津波の被害を受けた被

災地は以前と比べると確かに変わったと思いますが、まだまだやらなければならないことが残っているとしました。以前と違ってものもありました。それは津波で流された家の瓦礫などが集められてできた瓦礫の山です。あれを見たときは確かに復興しつつあるのだと思うと同時にあの山を撤去するのにどれくらいの時間がかかるのだろう、また、まだまだ完全に復興するのも時間がかかりそうだった。実際にボランティアをして、以前と作業内容が大きく変わったことに驚きました。やはり時間がたつと、被災者のニーズも変わってくるのだと思いました。ニーズが変わるとボランティアの人達の対応も変わってくるのは当たり前で、僕はそのボランティアの人達の対応力のすごさに驚きました。

#### 生徒E (11月)

その考えさせられたことの一つが、“実感”という言葉についてです。一回目のボランティア活動では半年前に一度ボランティアをさせてもらったいちご農園のお手伝いをしました。半年前は瓦礫の山だった農園が綺麗に整備され、新しい苗まで植えられていて、本当に復興したという感じでした。半年前を知っていることもあって、喜ぶ依頼主さんの顔を見て自分も本当に嬉しかったです。その後には車で海岸近くの状況を見に行きました。そこには農園とは対照的な風景が広がっていました。何も手の付いていない瓦礫の山に、浸水してボロボロになった家々、特に保育園で見た亡くなった園児へのメッセージカードと誰もいない保育園のガランとした光景が印象的でした。

この正反対な二つの光景を見て私は悲しみではなく虚しさを感じてしまいました。半年前にボランティアをして依頼主さんの助けになれていることを感じ、ほかにも多くのボランティアが活動する中、半年以上の時間が過ぎればと多少期待していたのですが、復興はまだまだ進んでいないようです。復興した農園の後にひどい景色を見たせいもあってか自分の実感できる範囲は狭いものなのだとなと気づかされました。多くの被災者の思いを背負って、実際に被災した人の気持ちを考えてなどの言葉がありますが、実際に等身大のその思いを実感するのはおそらく無理なのだと思います。でもだからこそ、少しでも感じようとして少しでも助けになれればという姿勢が大切になるのかもしれませんが、今までのボランティア活動を通じてこのことは考えてはいたのですが、

実感の限界をより等身大に実感してしまった今回のボランティア活動でした。

#### 生徒F (11月)

私は仕事をしていく中であることを考えた。それは私たちが壊した壁、天井、床そのすべてには人の想いが詰まっているということである。その一家の思い出が詰まっているということである。本当は依頼者だって自分の家を壊したいと思っていないはずだ。しかし、前に進もうという強い気持ちからボランティアセンターに依頼をしているのではないかと。そんなことを考えていると、自分たちが全く感情を抱かないまま単調な作業の繰り返しだけのような仕事をするとしたらボランティアをする人として失格だと感じた。そう考えて以来、中途半端なことだけは絶対にしたくないと思った。どんなに自分は汚れても構わない。むしろ、誰よりも汚れてやろうと思った。

